

「特集 近世ヨーロッパの 国際関係・植民地戦争まとめ」

京都府立朱雀高等学校 高田法彦

1. 問題意識

「大航海時代」にいち早く乗り出したポルトガル・スペインに対し、やがて、オランダ・イギリス・フランスがアジア・「新大陸」に進出し、抗争がくり返された。こうした16世紀から18世紀にかけての西欧列強の覇権争いは、ヨーロッパでの戦いと海外での植民地争奪戦が同時に展開するなど、生徒にとっては「いつ」「どこで」「何が」がつかみにくく、それぞれを関連づけずに覚え込んでしまいがちな分野であろう。そこで、「タペストリー」*p.159「特集 近世ヨーロッパの国際関係・植民地戦争まとめ」を中心にしてどう整理するかを考えてみたい。

2. アジアの拠点と「新大陸」獲得争い

ヨーロッパ列強の争いは、16世紀にはポルトガル・スペインを軸に展開し、17世紀にはバルト海貿易における優位やアジアの香辛料独占で繁栄したオランダが覇権を握った。やがて、イングランド銀行が設立されると、安全性の高いイギリス国債に、豊かなオランダ資金が投資されるようになり、イギリスはこうした資金で軍事支出を増した。3度にわたる英蘭戦争などでオランダは衰退するが、「タペストリー」p.159①でオランダの発展とイギリスに覇権が移った理由を確認しておきたい。

①ポルトガル

インド航路を開拓し、香辛料などアジアの物産獲得をめざしたポルトガルは、インド西岸の港市ゴアを拠点とし、1511年にはマレー半島の港市マラッカ(後にオランダが制圧)もおさえ、やがてモルッカ諸島にも商館を建設した。また、広州南方の港マカオを拠点として対明貿易を行った。こうしたポルトガルの活動は、アジア各地に成立して

いた地域交易圏内の貿易に「参入」するという方式であり、アジアの香辛料を確保してヨーロッパに供給したことを理解させたい。

②スペイン

アジアの物産をヨーロッパに供給したポルトガルに対して、「新大陸」(アメリカ)を勢力圏としたスペインは、この地で「世界商品」を生産しなければならなかった。ペルーのポトシやメキシコの銀、さらにはカリブ海諸島でのさとうきび栽培による砂糖がこれにあたる。その生産のための膨大な労働力として、当初は先住民が、やがてはアフリカ人奴隷が働かされた。

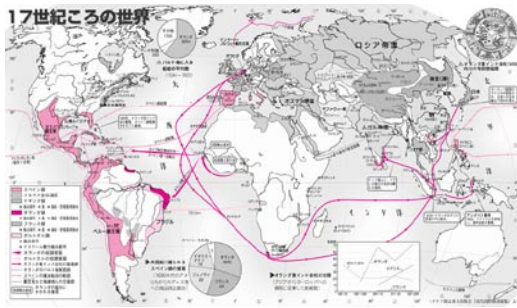
オランダの独立(1581独立宣言)や無敵艦隊の敗北(1588)は、スペインの覇権衰退を象徴する出来事である。スペインの衰退については、「タペストリー」p.151 Theme「スペインの盛衰とオランダの独立」でも確認させたい。また、私拿捕船による影響もあり銀の輸入量も減少したスペインは、1620年代を境にヨーロッパ各地を襲った「17世紀の危機」でも、深刻な影響を受けたという。

③オランダ

オランダについては、高度に発展していた商工業・漁業・農業の様子が見落とされがちである。世界金融の中心となったアムステルダムに、世界の資金が流れ込んだことから、低利で船の建造費が調達できたことや進んだ造船技術によって、バルト海貿易で圧倒的な優位を確立したことなど金融や工業の話題も盛り込みながら、「タペストリー」p.159①「オランダはなぜ発展したか」を活用して、「中継貿易だけの国」オランダというイメージを払拭したい。

この時期のポルトガル・スペイン・オランダの活動は、「タペストリー」p.30~31「16世紀ころの世界」・p.32~33の「17世紀ころの世界」などの

* 「最新世界史図説 タペストリー 八訂版」



「タペストリー」 p.32～33

地図を活用してそれぞれの拠点や植民地を整理することが有効であろう。

④イギリス・フランスの進出

アンボyna事件などインドネシアでオランダに敗れ、インドに拠点を置いたイギリスでは、インド産綿織物キャラコが普及（「生活革命」）し、これが産業革命へとつながっていく。イギリスの活動に関しては、マドラス、ボンベイ、カルカッタなどのインドでの拠点や、中国・アフリカ・北米を結ぶ貿易ルートと商品の流れを、「タペストリー」 p.34～35の「18世紀ころの世界」を活用してつかんでおきたい。

やがて、オランダがアジアで独占に成功した香辛料は、急速にヨーロッパでの人気を失い、対照的に、茶・コーヒー・砂糖などがもてはやされるようになっていく（「生活革命」）。香辛料・銀・キャラコなども含めて、アジア・アメリカの物産が、ヨーロッパの人びとの生活に欠かせない商品として定着し、それらを求めて各国が植民地獲得をめざしたことを理解させたい。

一方フランスはコルベールのもとで、重商主義政策を強力に押し進め、高関税政策によって輸入を減らし、国内産業を保護してオランダに対抗した。また彼はフランス東インド会社を再建した。



「タペストリー」 p.34～35

3. 第2次英仏百年戦争

1688～1815年までのイギリス・フランス間の植民地争奪戦争は第2次英仏百年戦争ともよばれる。ヨーロッパでの戦局や植民地での争い、講和条約に盛り込まれた内容が互いに関連づけられるようにしていきたい。

①プファルツ継承戦争（1688～97年）

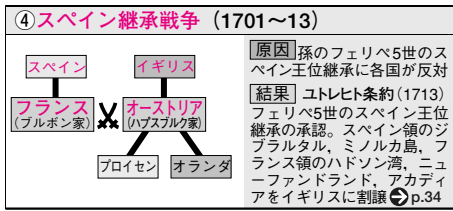
ドイツのプファルツ選帝侯の領土を要求したルイ14世に対して、神聖ローマ皇帝・オランダなどが同盟を結んで対抗した。こうした関係を「タペストリー」 p.154③③で確認したい。名誉革命の結果、1689年にオランダ総督のオラニエ公ウィレムが妻メアリとともにイギリス国王となったため、イギリスも同盟側に参加した。また、ルイ14世が先王ジェームズ2世を支持していたことから、ウィリアム3世の正統性をめぐる戦いともなった。アメリカの植民地で行われた戦争は、王の名からウィリアム王戦争とよばれ、ライスウィク条約が締結され、英仏ともに決定的な勝利はなかったが、ウィリアム3世はイギリス国王として承認された。これらに関連づけることで、当時の国際関係を理解させたい。

②スペイン継承戦争（1701～13年）

スペイン継承戦争時の対立関係は「タペストリー」 p.154③④も活用したい。

ルイ14世が孫をスペイン王位につけたことから、フランス・スペインが連携したこと、オーストリア・ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝が反フランスに立ったことは理解しやすい。ルイ14世がスペイン植民地におけるフランス商人の特権をスペインに認めさせたことから、イギリス・オランダが態度を硬化させて、フランス・スペインとの戦いが始まったことを盛り込むと、列強の関心事の一つがスペイン植民地の継承であったことが理解しやすくなる。この時期の北米での戦いがアン女王戦争である。ステュアート朝最後の国王アン女王は、グレートブリテン王国の成立時(1707年)の国王でもあり、スペイン継承戦争と年代を一致させたい。ユトレヒト条約で、イギリスは地中海での拠点を確保し、カナダ支配を前進させたが、こうした点も強調したい。「タペストリー」 p.34～

35「18世紀ころの世界」でもそれぞれを確認しておきたい。

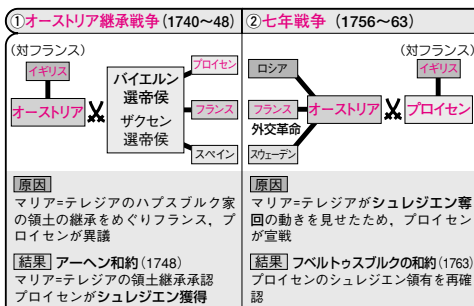


「タペストリー」 p154 ③ ④

③ **オーストリア継承戦争 (1740~48年)**

マリア=テレジアの即位に際して、バイエルン選帝侯・ザクセン選帝侯・スペイン王が王位を要求した。長年ハプスブルク家に対抗していたフランスがこれを支持し、オーストリア領のシュレジエンを要求したプロイセンのフリードリヒ2世も反オーストリアの立場に立った。この関係は「タペストリー」 p.157②①に整理されている。

すでにジェンキンの耳の戦争(1739年~)を戦っていたイギリスとスペインの対立は、オーストリア継承戦争に連なっていく。ハノーヴァー朝第2代のジョージ2世の時期であったことから、北アメリカに波及した戦いをジョージ王戦争とよび、イギリス・フランスは北米で植民地争奪を繰り返した。ジョージ2世は、ウォルポールが、国王の信任を得ていたにもかかわらず、下院の支持を失ったために辞職したとされる際の国王である。アーヘンの和約では、イギリス・フランスが占領地を互いに返還することが約されたが、両国の抗争は終わらなかった。一方、イギリスの外交によって、シュレジエンを失ったマリア=テレジアはイギリスとの間に政治的な距離を置くこととなり、



「タペストリー」 p157 ② ① ②

この後の外交革命につながっていく。こうした内容によって七年戦争とのつながりを意識したい。

④ **七年戦争 (1756~63年)**

長年敵対していたフランスに提携を呼びかけた(これを外交革命という)マリア=テレジアは、ロシアとも接近し、この陣営には多くのドイツ諸侯とスウェーデンも参加した。ドイツのハノーヴァーに利害を持つイギリスは、フリードリヒ2世がこの地の保護を約束したことから、プロイセンと同盟した。マリア=テレジアの外交政策に注目しながら「タペストリー」 p.157②②で対立関係を把握したい。

アメリカ大陸では、1755年に英仏間で戦争が始まっていた。フランスと先住民が連合してイギリスと戦ったためフレンチ=インディアン戦争とよばれ、海上を制覇したイギリスが勝利した。また、インドでは東南部で第3次のカーナティック戦争(1758~61年)が戦われ、イギリスが勝利した。1757年のプラッシーの戦いもイギリス軍の勝利に終わった。「タペストリー」 p.210の年表でインドにおける英仏の争いについては確認させたい。パリ条約(1763年)によって、イギリスは北米での優位ばかりでなく、インドでもシャンデルナゴルとボンディシエリを除く地域での優越権が認められたことを強調したい。

⑤ **アメリカ独立革命 (1775~83年) とナポレオン戦争 (1796~1815年)**

アメリカ独立革命とナポレオン戦争も英仏の対立関係に位置づけられる。独立革命の際にフランスはアメリカと同盟を結び、スペイン・オランダもアメリカ側に参戦、ロシアを中心にした武装中立同盟はイギリスの海上封鎖に対抗した。イギリスに対して、フランスなどの国々が連携して対抗したともとらえられる。

また、ナポレオンが大陸を制覇して樹立をめざした帝国は、各地と海上ルートで結ばれたイギリスに対抗した動きであったとも理解できるのである。

第2次英仏百年戦争での最終的な勝者はイギリスであった。「タペストリー」 p.159①の「イギリスはなぜフランスに勝ったのか」には、国民に重税を課して、これを戦争にもちいることができたイギリスと、それができなかったフランスの違いが示されており、英仏両国の戦費調達能力の違いを知る有効な手掛かりとなるであろう。